



▲北大の集中講義のため札幌を訪れた寅彦(右)と宇吉郎(左)が北大植物園で撮った写真(1932年)
(写真提供:一般財団法人中谷宇吉郎記念財団)

リレー随筆

寺田と中谷、師弟展への期待——神田 健三

「親愛なる寺田先生へ師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展」が開催される運びとなり、大変嬉しい思います。

雪の結晶の研究で知られる中谷宇吉郎(一九〇〇・六二)は、寺田寅彦(一八七八・一九三五)の薰陶を受けた実験物理学者です。

出身地の石川県加賀市に「中谷宇吉郎雪の科学館」があり、私は開設準備の頃から昨年まで二十年間勤務してきました。その間、高知を中心とした寺田寅彦を敬愛する人達とは親戚のように親しく交流することができました。

そして、寺田に関する資料を多数収蔵しておられる高知県立文学館から資料をお借りして、二〇一二年に加賀で「中谷・寺田展」を開きましたが、今度は高知で、新しい企画で開かれることです。

寺田と中谷について、ここ数年にも大きな話題になることが何度かありました。昨年の「世界結晶年一〇一四」もその一つです。世界結晶年は、X線によって結晶の構造を知る研究が始まって百年の節目を記念して、ユネスコが定めたものです。

その記念行事の一つ、十一月二一日に東大で開かれた講演会の第一部の題は、「寺田寅彦から百年」でした。百年前、この分野の研究で先陣を切り、ノーベル賞に輝いたのは布拉ッグ父子でした。しかし、寺田が、歐州との距離(情報伝達の遅さ)や、実験装置が不十分なのにもかかわらず、ほぼ同時に、同等の結論に達し、「ネイチャ」にも二回投稿していたことが紹介されました。

講演会の第二部では、宇吉郎の長女・咲子さんと二女・英二子さんが招かれて登壇し、「雪の結晶に魅せられた父・中谷宇吉郎」の講演をされました。会場は大きな拍手で包まれ、日本の結晶研究のもう一人の先達への敬意が示されたのです。

寺田が語りかけ、中谷が隨筆に書きとめた、「ねえ、ふしぎだと思いませんか」や、「大切なのは役に立つことだよ」の言葉が、「天災は忘れた頃にやって来る」(寺田)や、「雪は天から送られた手紙である」(中谷)の名言とともに、改めて多くの人達の心に届くことを期待したいと思います。

(前 中谷宇吉郎雪の科学館館長)

展覽會
Exhibition
紹介

親愛なる寺田寅彦と中谷宇吉郎展

2015年は、高知市で少年時代を過ごした物理学者・随筆家の寺田寅彦(1878-1935)の没後80年にあたります。

また寅彦は、多くの優秀な科学者を育てたことでも知られています。なかでも一番よく知られているのが、雪や氷の研究で有名な、中谷宇吉郎(1900-1962)です。

「天災は忘れた頃にやって来る」(寅彦)、「雪は天から送られた手紙である」(宇吉郎)などの二人の言葉と共に、寅彦と宇吉郎の親しい交流の中で育まれた、科学、芸術、生き方を紹介します。

展示構成

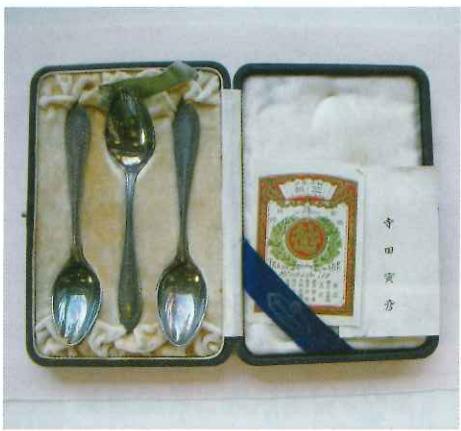
2. 師弟の出会いと交流

1. 寺田寅彦と中谷宇吉郎

寅彦は、東京で生まれ、少年時代を高知で過ごし、熊本の第五高等学校を卒業後、上京して東京で過ごしました。一方の宇吉郎は、現・石川県加賀市で生まれ、東大に進学し、卒業後は北海道の大学へ赴任します。

南と北、異なる風土で育った一人が、同じような研究を志し、親しい交流を続けたといふのは、とても不思議な縁を感じさせます。

このコーナーでは、展覧会の導入として、寺田寅彦と中谷宇吉郎の生涯や人となり、二人のゆかりの地、おすすめの作品などをパネルでご紹介し、皆様により身近に感じて頂きます。



▲宇吉郎の結婚祝いに寅彦が送ったスプーン
(一般財団法人 中谷宇吉郎記念財団蔵)

宇吉郎は、師・寅彦から科学や芸術など多くの面で影響を受け、生涯、師を深く敬愛しました。二人の足跡、出会いと寅彦の熏陶の様子、温かい師弟の交流が窺える資料をご紹介します。

※本展は、「中谷宇吉郎と寺田寅彦展」(中谷宇吉郎雪の科学館・2012年10月25日~2013年1月29日)を高知で再構成したものです。

① 寅彦・宇吉郎について

寅彦と宇吉郎は、研究者としてだけではなく、日常生活においても深いかかわりを持っています。年譜とともに、寅彦が新婚の宇吉郎に送ったお祝い品のスプーン、宇吉郎のライカのカメラなど、二人の愛用品を紹介します。

② 「球皮事件」と「火花放電」の研究

1924年3月19日、海軍飛行船SSS3号が爆発・墜落し、搭乗員5名が殉職しました。寅彦は11月にその原因調査を委嘱され、学生だった宇吉郎とともに「飛行船の球皮の放電の実験」を行います。

「スパーク」関連の論文などの貴重な資料とともに、宇吉郎の火花への興味や、寅彦との研究の様子をご紹介します。

③ 宇吉郎の北大赴任と雪の研究

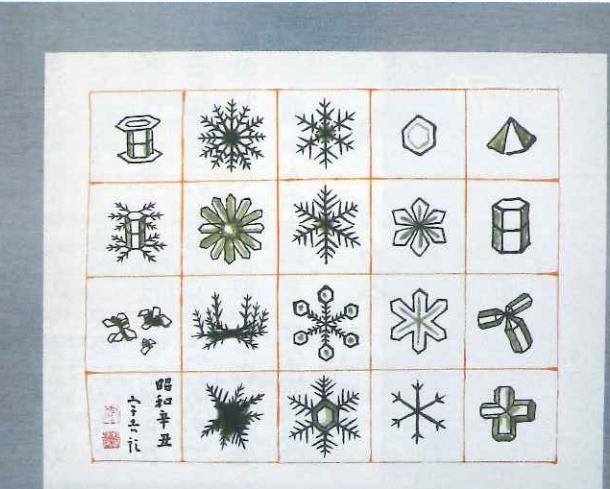
宇吉郎は1930年、北海道帝国大学理学部の助教授として札幌へと赴任し、教授に昇任した3年目の冬、雪の研究をはじめました。その年(1932年)の秋には、北大の集中講義で寅彦が札幌訪問しています。宇吉郎が雪の研究で到達したナカヤ・ダイヤグラムは、湿度と温度によって結晶の形

が変わることを示した、雪氷学としての大きな成果であり、寅彦が構想した「形の物理学」の見事な具体化でもあります。

結晶の美しい写真などとともに、宇吉郎が励んだ雪の研究をご紹介します。

かつて寅彦は、第五高等学校時代の英語教師、だつた夏目漱石と出会い、文学への造詣、また絵画など芸術への興味を深めていました。宇吉郎は、師の影響を受け、1925年頃から油絵をたしなみ、また「理学部雑誌」に随筆や詩を発表するようになります。漱石と寅彦、寅彦と宇吉郎という師弟のつながりを、絵画や隨筆作品を通して感じて頂きます。

▶宇吉郎画「雪華図説」(複製)
(中谷宇吉郎雪の科学館友の会蔵)



平成27年
12月5日(土)

平成28年
1月31日(日)

※12月27日~1月1日
は休館となります。

観覧料500円

会
紹
介
覽
展
Exhibition

親愛なる寺田先生 ～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～

平成27年
12月5日(土)

平成28年
1月31日(日)

※12月27日～1月1日
は休館となります。

観覧料500円

■展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
(約20分程度)

参加費: 要当日観覧券
申込: 不要。
直接会場にお越しください。

普段はなかなか見ることのできない科学資料や、話題になつた新資料などを見ることができる貴重な機会です。実験イベントなど、お子様もお楽しみいただけますので、皆さまお誘い合わせの上ぜひお越しください！（学芸課／永橋禎子）

サウンドアーティスト・mamoru氏などの作品をはじめとするアートや、世界結晶年、二人の名のついた小惑星など、寅彦と宇吉郎の世界を、さまざまな視点でご紹介します。また、石原純宛書簡（当館蔵）など、新資料紹介のコーナーもあります。

「天災は忘れた頃にやつて来る」（寅彦）、「雪は天から送られた手紙である」（宇吉郎）など、師弟の研究や交流から生まれた名言とともにまつわる資料、寅彦や宇吉郎の随筆が掲載された教科書をご紹介します。

3. 言葉（企画展示室内）

Intermezzo（間奏曲）



▶ mamoru《étude no.19》本／日常のための練習曲
「病院の夜明けの物語」のための「アリエッショ」、
短い前奏曲（とくせき）」2014年
© the artist, courtesy of Museum of art WARAKOH
Yuka Tsuruno Gallery 撮影／mitsu maeda

◆関連企画のご案内◆

■記念講演 「寅彦と宇吉郎」

- ・日 時：12月12日(土) 午後2時～3時30分
- ・場 所：高知県立文学館1Fホール ※開場は午後1時～
- ・講 師：前 中谷宇吉郎雪の科学館館長 神田健三氏
- ・定 員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
- ・参加費：参加には**当日観覧券**が必要です。

■雪と氷のふしぎ実験

宇吉郎の雪と氷の研究を実際に体験してみよう！

（予定実験…氷の花（チンダル像）、氷のステンドグラス、氷のペンダント、ダイヤモンドダスト）

☆本実験

日時／12月13日(日) 午後2時～3時30分

場所／高知県立文学館1Fホール

講師／前 中谷宇吉郎雪の科学館館長 神田健三氏

参加費／諸経費 100円と**当日観覧券**が必要です。

定員／50名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）

☆ミニ実験 日時／会期中の日曜日（12月6日、27日を除く）

午後2時～3時

場所／高知県立文学館1F こどものぶんがく室

講師／当館職員、寺田寅彦記念館友の会会員

参加費／諸経費 100円と**当日観覧券**が必要です。

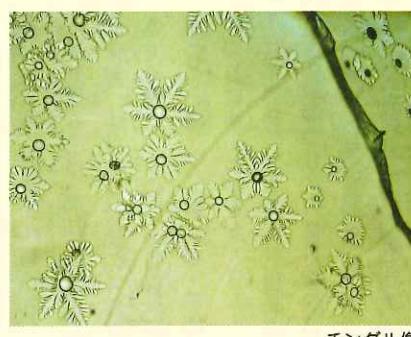
定員／10名 先着順（申し込み不要）

■文学散歩 「寅彦先生の散歩道（仮）」

高知にある寺田寅彦のゆかりの地を、細川光洋先生（静岡県立大学）と一緒にめぐります。

日時／2016（平成28）年1月11日(月・祝) ※時間・参加費などの詳細はお問い合わせください。
集合場所／高知県立文学館 定員／30名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）

他にも紋切りイベントや朗読の会など、多彩な関連企画を用意してお待ちしています。



チンダル像

常設展虫が森

か
ね

第六回

シリーズで、
変わった常設展示
をご紹介！

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「自由民権」コーナー・宮崎夢柳、「反骨の大衆文学」コーナー・森下雨村、「近現代の詩歌」コーナー・北見志保子を新たにご紹介しています。

展示作家紹介 森下雨村

森下雨村は1890(明治23)年佐川町生まれの編集者、小説家。本名は岩太郎。早稲田大学時代の恩師・長谷川天渓の誘いで博文館に入社し、「新青年」の初代編集長として創刊に携わり、辣腕をふるいます。

「新青年」は農村青年向けの海外発展や戦争特集の記事を中心とした雑誌としてスタートしますが、雨村は「新青年」の特色として創刊号から外国物の探偵小説を取り入れ、探偵小説の懸賞小説も募集。創刊翌年には探偵小説特集号や増刊号を出し、探偵小説雑誌として好評を博します。

大正11年冬、雨村の元に平井太郎、のちの江戸川乱歩から「二銭銅貨」と一枚の切符の原稿が届きます。

雨村は乱歩に賛辞と激励の手紙を出し、翌年4月号に「二銭銅貨」を掲載、日本探偵小説の巨人・江戸川乱歩の衝撃的な文壇デビューとなつたのでした。

雨村は編集長として乱歩の他にも多くの作家を発掘し、育みました。なかでも横溝正史は大正10年に「恐ろしき四月馬鹿」で「新青年」デビューし、昭和2年からは2代目編集長として活躍。のちに探偵小説界の代表的作家となりました。

昭和6年暮、編集局長となつていた雨村は博文館を退社。作家としてスタートし、「報知新聞」に「青斑猫」を

連載、「少年俱楽部」「謎の暗号」「電気水雷事件」を連載するなど少年探偵のシリーズを発表し、人気を博します。昭和9年頃より鮎釣り解禁に合わせて佐川へ帰郷するなど、徐々に故郷での生活が長くなり、昭和17年には一家をあげて帰郷。釣りと農業に明け暮れる日々を送ります。昭和15年頃より書きためていた釣り隨筆は、没後『猿猴川に死す』として刊行され、ロングセラーとなりました。

今回の展示では「猿猴川に死す」の原稿や、家族ぐるみの付き合いがあつた横溝正史の書簡の他、探偵小説の名訳者でもあつた雨村の翻訳本『月長石』(W.W.コリンズ著)や『樽』(F.W.クロフツ著)などの資料を通して、わが国探偵小説の育ての親とも言われる雨村の、編集者、そして探偵小説家としての文学活動の軌跡をご紹介しています。

(学芸課／岡本美和)



▲展示風景

文化財産と文学館によせて
館長室から

元吉 喜志男

全国の主要な文学館を紹介している「全国文学館ガイド」(全国文学館協議会編／小学館2013.1発行)には、全国91の文学館が掲載されています。一つの文学館、上林暁文学館、吉井勇記念館、大原富枝文学館、上林暁文学館の4館が紹介されています。一つの県で4館というのは、東京都(13)、北海道(6)、長野県・石川県(5)に继いで、群馬県・静岡県・大阪府とともに全国で

5番目に多い数字です。

日本列島の文学館の分布状況は東高西低で、北海道・東北・関東・中部エリアの東日本(24都道県)に約3分の2に当たる61館があり、近畿・中国・四国・九州エリアの西日本(23府県)はその約半分の30館となっています。これら数字からも文学を育む風土のようなものを感じます。

日本初の近代文学総合資料館である日本近代文学館が開館したのは、1967(昭和42)年でした。その翌年には、加賀藩の時代から文学・芸術の豊かな風土づくりを育んだ土地柄である金沢に、地方都市では初の総合文学館として旧第四高等学校の図書館書庫を利用した石川近代文学館が開館しました。

高知県に県立文学館が誕生したのは、それから約30年を経た1997(平成9)年です。当館を訪れるお客様をご案内すると「高知はこんなにも多くの文学者を輩出しているのですか!」と感心されることがあります。土佐の自然や独特の精神風土の中で育まれてきた個性ある高知ゆかりの文学者たちに受け継がれてきたDNA。

このガイドブックに1館も掲載されていない県が10県(東日本4県、西日本6県)もあることなども考えると、龍馬に代表される維新の志士たちや、まんが王国・高知などとともに、本県の誇る貴重な文化財産として、さらに重視するに値する分野のように思えます。

風土と血縁のふるさと — 清岡卓行の幻 —

猪野 瞳

清岡卓行が本籍地田野をたずねたのは二回

だつた。父は田野、母は奈半利の近隣うまれで大連にわたり、そこで卓行はうまれた。満鉄技師の恵まれた息子として育ち、戦時下、東京の第一高等学校に入るが、休学して大連に帰つていたとき徴兵検査を受けに本籍地の高知へ帰つてくる。休学であつたため肺の既往症があるとみなされ即日帰郷、兵役免除、そのとき初めて本籍地田野をたずねた。21歳のときである。叔父叔母のところで半月滞在、父母のうまれた風土、本格的な土佐言葉、ふるさとを知つた。12月の田野には地取れの青野菜、米があり、近くの海では新鮮な魚がとれた。雪にとざされる「生れ故郷」の当時の外地大連とちがう父母の生れ育つた風土の匂い、本籍地を知つた。

次に田野をたずねたのは昭和47年、上林暁

の「四万十川幻想」や田宮虎彦の「足摺岬」
▲大野台地から望む田野町平野部分(年代不詳)
写真提供/田野町教育委員会

卓行は田野を「風土のふるさと」と呼んでいた。このとき初めて本籍地田野をたずねた。21歳のときである。叔父叔母のところで半月滞在、父母のうまれた風土、本格的な土佐言葉、ふるさとを知つた。12月の田野には地取れの青野菜、米があり、近くの海では新鮮な魚がとれた。雪にとざされる「生れ故郷」の当時の外地大連とちがう父母の生れ育つた風土の匂い、本籍地を知つた。

次に田野をたずねたのは昭和47年、上林暁の「四万十川幻想」や田宮虎彦の「足摺岬」
卓行は田野を「風土のふるさと」と呼んでいた。このとき初めて本籍地田野をたずねた。21歳のときである。叔父叔母のところで半月滞在、父母のうまれた風土、本格的な土佐言葉、ふるさとを知つた。12月の田野には地取れの青野菜、米があり、近くの海では新鮮な魚がとれた。雪にとざされる「生れ故郷」の当時の外地大連とちがう父母の生れ育つた風土の匂い、本籍地を知つた。

卓行は田野を「風土のふるさと」と呼んでいた。このとき初めて本籍地田野をたずねた。21歳のときである。叔父叔母のところで半月滞在、父母のうまれた風土、本格的な土佐言葉、ふるさとを知つた。12月の田野には地取れの青野菜、米があり、近くの海では新鮮な魚がとれた。雪にとざされる「生れ故郷」の当時の外地大連とちがう父母の生れ育つた風土の匂い、本籍地を知つた。

卓行は田野を「風土のふるさと」と呼んでいた。このとき初めて本籍地田野をたずねた。21歳のときである。叔父叔母のところで半月滞在、父母のうまれた風土、本格的な土佐言葉、ふるさとを知つた。12月の田野には地取れの青野菜、米があり、近くの海では新鮮な魚がとれた。雪にとざされる「生れ故郷」の当時の外地大連とちがう父母の生れ育つた風土の匂い、本籍地を知つた。

(詩人)

安岡章太郎の「海辺の光景」の作品舞台を追う旅のときだつた。田野では従兄や町長に会うが、最初の田野たずねから29年ぶりだつた。

詩人、作家、評論家として多忙な50歳になつて朝日新聞にかいだ。これがほとんど唯一の土佐ものだつた。

ふるさとは生れ故郷のことであるが、清岡卓行は大連を「風土のふるさと」と呼んで大連と大連ものをかきついできた。その一方で本籍地、父母の生れ育つた田野、奈半利の「血縁のふるさと」にもどこかひかれるものがあつたろう。父母の血を通じて本籍地といつながら、外地生れ外地育ちだつたが父母の会話の土佐言葉に本籍地田野は残像のように生きてきたのであるまいか。

先日、その本籍地である田野をたずねた。今では田野もバイパスが田園だったところをぬけ、病院や店舗がたち並び、すつかりどこにでもある町村に変つていて。かつては海辺に沿う県道に軒の低い商店街がつづき貯木場や木材商でにぎわう料亭花屋があり、田んぼの拡がる先には海風をうける段丘があつた。いま段丘の上には町を見おろす中芸高校があり、その下に寮があつたが、とりこわされ空地は駐車場になつていて。そこが清岡卓行の本籍地跡だつた。その岡地集落の前には農地が残りハウス茄子が育つていた。ここが清岡卓行が住みついたことのない土佐の「風土のふるさと」へ血縁のふるさとであつたのかという感慨があつた。



▲『山河』復刻版(右)と
当館提供の「山河」第1号

資料受贈報告

—寄贈資料から—

『山河』復刻版

第1巻 第1号～第14号

三人社刊 2015年8月
388頁 A5判
三人社寄贈

受贈報告(平成27年8月～10月)敬称略

▼中脇初枝・魚のように 中脇初枝著 新潮社刊

▼藤原絢沙子・百年桜 人情江戸彩時記 藤原絢沙子著 新潮社刊

オズボーン著 KADOKAWA刊

祥伝社・「風の市兵衛シリーズ1～15」辻堂魁著

林嗣夫著 そのようにして 林嗣夫著

「詩と思想」編集委員会編 土曜美術社出版販売他

▼和田和子・「鶴亀 和田和子著刊」

▼山崎波浪・「花開く蓮 山崎波浪短歌集 山崎波浪著 高知歌人社刊」

詩集 製ける 山形敬介著 オフィス・コム刊他

▼美巧社・「霸王一長宗我部元親一上・中・下・続西村忠臣著 美巧社刊」

「詩と思想」編集委員会編 土曜美術社出版販売他

▼横田晴光・「飢餓船 笹山久三著 河出書房新社刊」他

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。

著者高知歌人社刊
詩集 製ける 山形敬介著 オフィス・コム刊他
▼美巧社・「霸王一長宗我部元親一上・中・下・続西村忠臣著 美巧社刊」
「詩と思想」編集委員会編 土曜美術社出版販売他
▼横田晴光・「飢餓船 笹山久三著 河出書房新社刊」他

浜田は小説志望をやめ、詩人になることを決意します。

浜田が始めた個人誌「山河」の名は、弥太の未完詩集「山河」からとられたもので、初期の誌上には、その詩集に収録されるはずだつた詩が掲載されています。また、創刊に前後して高知の詩人らとも交流。個人誌の頃には島崎曙海や桂井和雄が寄稿、同人誌となつてからは大崎二郎が参加しています。

「山河」は1961(昭和36)年の終刊までに通巻3号が刊行されていますが、今回

の三人社による復刻に際し、当館から第1号を提供したところ、貴重な原本の存在を喜んでくださいました。当館もまた、お役に立てたことをうれしく思っています。

(学芸課／小松路代)

トピックス

文学専門講座(平成27年度)のご案内

今年度の「文学専門講座」は、下半期(10月～3月)に開催いたします。1つのテーマについて、連続講義をします。今年度は「高知の大衆文学の魅力に迫る！」をテーマに高知ペンクラブ会長、高橋正先生をお招きし、全6回の講義を行います。

文芸賞受賞者から見ても、高知出身の作家では、直木賞受賞者を5人(田岡典夫、小山いと子、宮尾登美子、板東真砂子、山本一力)輩出するなど、大衆文学の名手の多さが分かります。大衆文学といふと、一般的には通俗小説などを指し、純文学と対比して使われることの多い言葉ですが、娛樂性の高いこれらの作品があればこそ、文学を身近に感じられるとも言えます。

文学館の常設展示室には、「反骨の大衆文学」というコーナーがあります。このコーナーでは容易に権力におもねらない、頑固な土佐人気質を「反骨」という言葉で表現しているのですが、確かに「い」つそう、に通ずる豪気な気質が土佐文人の作品の底流にあるようです。

今回講義で取り上げる作家は、黒岩涙香、田中貢太郎、浜本浩、田岡典夫、田村泰次郎と明治から戦後にかけて大衆文学の担い手として活躍した作家たちです。黒岩涙香は安芸市出身で、わが国の探偵小説、大衆小説の草分け的存在です。『巖窟王』などの翻訳が有名ですが、最近では『幽靈塔』が注目されました。田中貢太郎は高知市仁井田の出身、『旋風時代』で明治維新の裏側を描き、また『怪談全集』も有名です。浜本浩は『浅草の灯』など青春の地、浅草を舞台とした青春小説で知られています。田岡典夫は『小説野中兼山』、『強情いちご』が代表作。そして田村泰次郎は両親が高知の方で、『肉体の悪魔』など戦場をぐぐり抜けた人間だけが持つ独特的の生命観を描き、「肉体派作家」と呼ばれました。

●文学専門講座『高知の大衆小説家たちの魅力に迫る!』

第1回…10月24日(土) 演題:高知の大衆文学概要

講師:谷岡真衣(高知県立文学館/主幹)

※以下、第2回～第6回の講師:高橋 正氏(高知ペンクラブ会長)

第2回…11月28日(土) 演題:①黒岩涙香 -日本の探偵小説の元祖-

第3回…12月26日(土) 演題:②田中貢太郎 -空前のヒット作『旋風時代』他-

第4回…1月23日(土) 演題:③浜本浩 -浅草ものの名作「浅草の灯」他-

第5回…2月27日(土) 演題:④田岡典夫 -直木賞「しばてん梗」・「強情いちご」他-

第6回…3月26日(土) 演題:⑤田村泰次郎 -戦後、肉体派文学の先駆者-

※いずれも定員100名、受講無料、時間:午後2時～3時30分

明治期の作品は文語体ですが、慣れてしまえば内容に引き込まれる作品ばかりです。当時の人々がこれら 작품をどんなに胸躍らせて読んでいたのか、想像しながら読むのも面白いのではないかでしょうか。

27年度文学専門講座は毎月第4土曜日に開催しています。お問い合わせ、お申し込みは、文学館学芸課文学専門講座係(088-822-0231)まで。

(学芸課／谷岡真衣)



巡回展 東京写真月間2015 in 高知展

「写真の日」記念公募により選ばれた優秀作品を展示



▲環境大臣賞／「降り注ぐ」垂 秀夫(東京都)

巡回展 東京写真月間2015 in 高知展

期間:平成28年1月31日(日)～2月7日(日)

場所:高知県立文学館1Fホール

観覧料:観覧には常設展観覧料360円が必要です。

感動発信！感動共有！をキヤツチフレーズに掲げ、今年も公募による「写真の日」記念写真展が全国で巡回開催されており、中四国では、当館が唯一の会場となり開催されます。この写真展は撮影技術より「写す人のこころが感じられる作品」が選ばれています。当巡回展が、写真が核となり家族や友達と語り合う「時」と「場」になることを願っています。

※今回の高知展では、入賞入選作品全308点の内、上位入賞作品を中心に左記の作品を展示いたします。

【展示作品】外務大臣賞1点、環境大臣賞1点、優秀賞10点、レディース賞6点、ヤング賞6点、四国近郊・協賛会社賞12点、高知県須崎市賞2点、入選2点
(但し、都合により一部変更になる場合もございます)

特別協賛: 天然写真家・前田博史氏の作品より、東部博開催に関連し室戸世界ジオパークのネイチャーフォト展示。
(副館長／猪野満)



宮尾登美子追悼展

好
評
開
催
中
！

ありがとう。～88年の生涯を偲んで～ 宮尾登美子さん



▲展示室風景



▲対談の様子

**宮尾文学の魅力を紹介する展覧会。
多彩な関連イベントも開催し、
その軌跡をふりかえります。**

宮尾登美子さんが2014(平成26)年12月30日に亡くなられて、10ヶ月以上が経ちました。月日の経つのは本当に早いものです。

現在高知県立文学館では、追悼展「ありがとう。宮尾登美子さん～88年の生涯を偲んで～」を開催しており、連日、県内外の皆様が宮尾登美子さんの人と文学を楽しみ、ご覧くださっています。

2015(平成27)年10月12日(月・祝)

には、

関連企画 郷土出身作家の山本一力さんと

女優の檀ふみさんによる「宮尾登美子さん

の魅力」と題しての記念対談がおこなわれ、

昭和という激動の時代にその構成力、表現

力をもって、一気に駆け抜けた国民的作家

宮尾登美子さんの魅力が紹介されました。

山本一力さんは、宮尾さんから「舍弟」と

呼ばれ、宮尾さんを「姉御」と呼ぶようになつた絆や、宮尾さんの「主人にふれ

「孤独な作家活動を支えたのは、ご主人で

いました。

また、NHKドラマ「藏」で主人公烈の叔母

佐穂役を演じており、その際、宮尾さんから

「佐穂は、演じたいという女優さんも多く、芯

の強い魅力ある女性」との話しうけ、役を

見直したとも話されていました。

同日、高知県立文学館がある藤並の森では、

富尾さんの好きだった音楽を聴く木洩れ日コンサートを開催。穏やかな秋の日差しの中、バイオリンや電子ピアノによるモーツアルトなどの曲が演奏され、参加された皆さんは豊かな時間を過ごされていました。

富尾さんが執筆した小説の殆どは、映像化・舞台化されており、多くの人びとに愛されています。その文体は凜として気高く、音楽の調べのように人びとの心に染み込んでいます。

富尾さんは11月23日まで。今回、多くの読者の皆様に宮尾文学の魅力をお届けできました

（学芸課長／津田加須子）

ありがとう。
宮尾登美子さん

平成27年 9月19日(土)～11月23日(祝・月)

会場：高知県立文学館 企画展示室 会期中無休

観覧料：500円（常設展含む）開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

◆関連企画のご案内◆

■小学生による一絃琴の演奏と朗読を楽しむ

- ・開催日：11月7日(土) 午後2時～午後3時
- ・場所：高知県立文学館 1階ホール
- ・内容：香南市内の小学生たちによる「漁火」などの演奏と宮尾登美子著『一絃の琴』の朗読
- ・参加費：無料

■ファイナルイベント

～ありがとう。宮尾登美子さん～

- ・開催日：11月23日(月・祝) 午前9時～
- ・場所：高知県立文学館 2階ロビー
- ・内容：先着50名様に宮尾登美子さんグッズを差し上げます。
- ・参加費：要当日観覧券

他にも毎週土曜日の午後1時30分より展示解説がございます。

11月23日
まで

ありがとう。宮尾登美子さん ～88年の生涯を偲んで～

9月19日(土)～11月23日(月・祝) 場所:企画展示室 観覧料:500円

2014(平成26)年12月30日に88歳で逝去された作家宮尾登美子さんの追悼展。

日本の伝統文化や歴史上の女性たちの生き様やその生涯をテーマに数々の名作を執筆され、多くの人々に感動と勇気を与えてくださった宮尾登美子さんの人と文学について、資料や写真などを通してご紹介しています。

詳細は7ページをご覧ください。



写真提供/世界文化社

12月～1月
開催!

親愛なる寺田先生～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～

12月5日(土)～平成28年1月31日(日) ※12月27日～1月1日は休館となります。

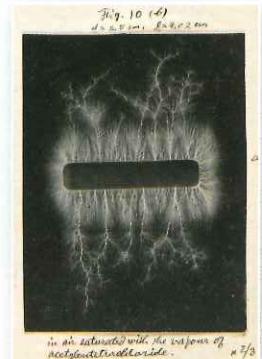
場所:企画展示室 観覧料:500円

2015年は、高知市で少年時代を過ごした物理学者・随筆家の寺田寅彦(1878-1935)の没後80年にあたります。

また寅彦は、多くの優秀な科学者を育てたことでも知られています。なかでも一番よく知られているのが、雪や氷の研究で有名な、中谷宇吉郎(1900-1962)です。

「天災は忘れた頃にやって来る」(寅彦)、「雪は天から送られた手紙である」(宇吉郎)などの二人の言葉と共に、寅彦と宇吉郎の親しい交流の中で育まれた、科学、芸術、生き方を紹介します。

展覧会のご案内をしています! 詳細はこの館報の表紙・2・3ページをご覧ください。



写真提供:一般財団法人 中谷宇吉郎記念財団

※年末年始のため、12月27日(日)～1月1日(金)は休館いたします。

新年は**1月2日(土)**より開館いたします。

巡回展 東京写真月間2015 in 高知展

平成28年1月31日(日)～2月7日(日)

予告
2月～4月
開催!

宮沢賢治 ことばの宇宙展

平成28年2月11日(木・祝)～4月17日(日)

場所:企画展示室 観覧料:500円

宮沢賢治の故郷、岩手県花巻市は理想郷イーハトーブとして、動物や自然が生き生きと描かれた作品の舞台となっています。

自然との交感の中で生まれた詩や童話のことばの宇宙は、没後80余年たった今も、多くの人々の心を引きつけてやみません。

宮沢賢治のすきとおった物語のことばを美しい写真と共にご紹介します。



羅須地人協会と宮沢賢治像

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時 (入館は、午後4時半まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。

一般360円 企画展はそれぞれ異なります。

20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、

高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、

精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者

健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、子どものぶんぐく室、

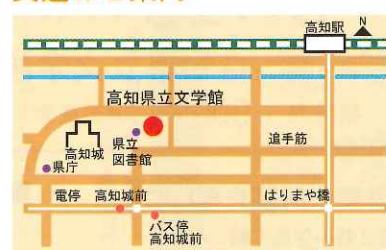
茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バスく県庁前行

「公園通り」下車、北へ徒歩5分

●JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)

●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分

●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分



〒780-0850

高知市丸ノ内1丁目1-20

電話 088-822-0231

FAX 088-871-7857